

色と生体

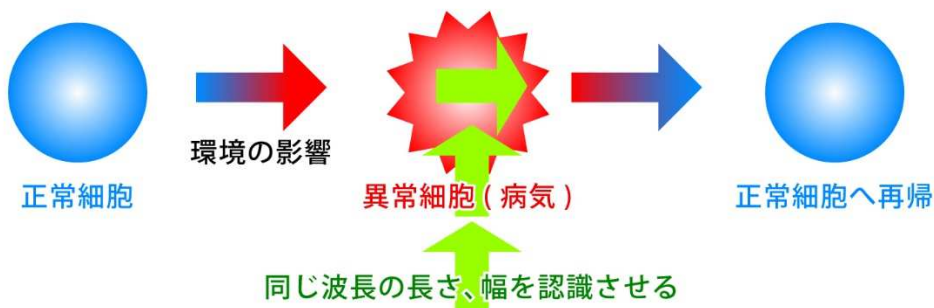
細胞からは生体光子（バイオフィトン）が発生しております。バイオフィトンは1923年にロシアの生物学者アレクサンダー・ダルビッチが発見し、その後1974年にフィリップ・アルバート・ポップが光電子増倍管（高感度光検出器）を用い、DNAからバイオフィトンが発生している事を確認しました。このバイオフィトンは言い換えますと光となり、光は粒子性と波動性を併せ持っています。波動性の広義の中に波長が含まれているのですが、このバイオフィトンの波長が色彩治療における重要なキーワードとなるのです。

また、細胞だけでなく、あらゆる物質から波長は出ています。色彩治療のカラー布も同じであり、色が異なる事によって波長も全て異なります。この波長は細胞独自の活動内容によって長さ・幅が変化します。その時の身体環境状況によって目まぐるしく変化しているのです。環境に対応していくには独自の細胞が適応していかなければならないからです。細かく言えば場と場の移動でさえ環境が異なり、細胞は適応のため変化し、細胞から出る波長も変化します。これは自律分散システムで説明が出来るわけです。自律分散システムとは、システムを構成する各要素(サブシステム;自律性を強調する意味で個ともいう)が個々に自律性を保ちつつ行動しながらお互いに協調し、システム全体として秩序を生成するシステムのことであります。細胞が自律的に単体で作用したり、複数の集合体として組織的に作用したりするのであります。

ここからが重要なのですが、正常細胞が異常細胞へと変化していく。いわゆる病気になる場合というのは、生活環境下が細胞にとって常に悪条件（身体への負担）であった場合、細胞はその条件が当たり前だと認識します。病気になるまでには時間がかかり、様々な環境の影響を受け異常細胞へと変貌していくのです。

正常細胞から異常細胞へと変化すると共に、細胞から出る波長も変化しています。この波長に影響を与え、波長の長さ・幅を正常細胞（元の細胞）と同波にすれば、その同波である期間を長く保たせれば、細胞がこの環境下が当たり前と認識し、正常細胞に再帰します。これが色の生体における作用であります。

異常細胞の波長に同調した波長を重ねる事で、共鳴し細胞独自の『当たり前』がリセットされ、正常細胞へ再帰するのです。これは逆位相として説明されています。

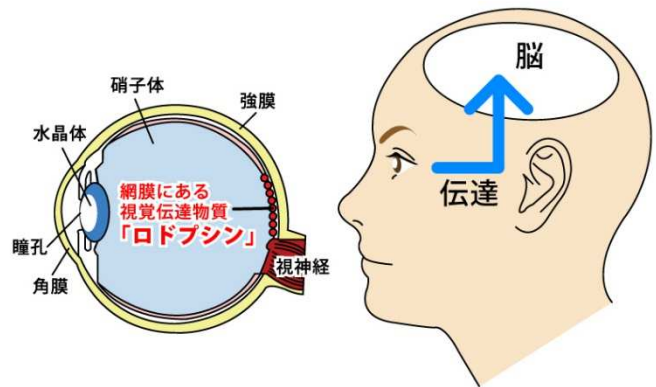


色彩治療とは

壁面を赤一色で塗った部屋と青一色で塗った部屋の2部屋があるとします。赤一色で塗った部屋に入ると、興奮作用が促され交感神経優位になり、奮起して落ち着かないといった症状が出てきます。また青一色で塗った部屋に入ると、抑制作用が促され副交感神経優位になり、集中出来たり、落ち着いたりといった症状が出るという事も実証されています。(生活環境における色彩が人体に及ぼす影響に関する研究；橋本令子)

ヘレンケラーも盲目で有名ですが、赤色、青色と様々な色を手にとって触って色を言い当てていたと自書の「わたしの生涯」に書いております。目が見えないのに何故分かるのでしょうか？

本来、人は眼の中に存在するロドプシンという光受容体物質が備わっており、光を受け取ったロドプシンが脳へ伝達し、赤色、青色と認識し我々の視野に色として投影されているのです。しかし、残念ながらヘレンケラーには肝心の眼のロドプシンが機能していません。眼が見えないのに、色を言い当てる要素はどこにあるのか？



それは**皮膚**に答えがあります。

実は、皮膚には光を受容するタンパク質が存在すると最近の研究で明らかにされてきております。(傳田光洋氏著書参考)

皮膚自身が光>波長を感受し、光駆動蛋白質を使って、ホルモン分泌を調整したり、神経伝達物質を調整したり、自律神経のバランスに作用したりするので。

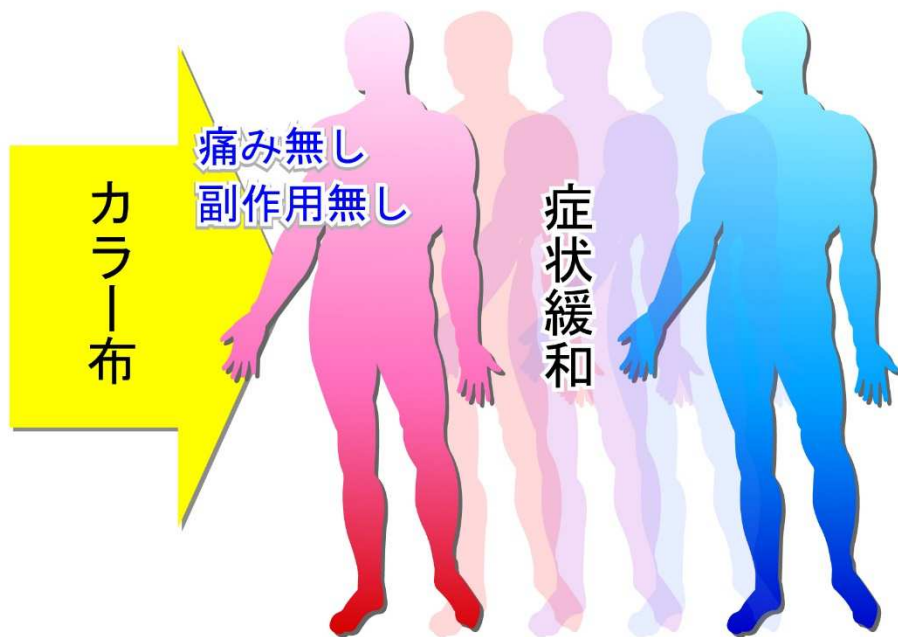


これは光遺伝学を用いると容易に説明が可能となっています。光遺伝学とは、光によって活性化されるタンパク分子が遺伝学的手法を用いて特定の細胞に発現させ、その機能を光で操作する技術であります。光の狭義である波長も大きく関わっているのです。

このことを考えますと、色彩治療のカラー布を皮膚に貼付することで症状緩和に繋がること
の理由が何気に分かってくる事と思います。

色彩治療はその方に必要である波長がどれなのかを選別する事ができ、その患者様に合ったオーダーメイド治療が可能なのです。

カラー布を貼付するだけなので、副作用は全くありません。治療に痛みも伴いません。
正にこれからの医療であり、画期的な治療法となっているわけです。



治療の流れのご紹介

現在探索棒の種類は 15,000 種類以上あり、細胞、遺伝子、素粒子、クオークなど存在するあらゆる物質を色に変換し各疾患に適応することが可能となっております。問診後に患者様に適応する探索棒を選択し、適応する探索棒で疾患に対応するツボ・患部直接にマーカーで印を付けます。あとは印を付けた箇所に探索棒に対応する色彩布を貼付して治療は終了です。治療後、色彩治療は即効性がありますのでその場で効果を実感出来ます。

また、選択された探索棒には疾患名が記載されてますので、患者様の疾患の原因をお伝えする事が可能となっております。



患者様がどのような痛みで、どのような症状なのかを細かく問診します。



問診に基づき、患者様の中指先端に探索棒を当てて、**パワーテスト**でカラーを選びます。



選び出されたカラーをシールに貼り、患部（ツボ）に貼付します。



即効性のある治療なので、その場で患者様に確認がとれます。